

2022年1月30日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

詩編 110 : 1~7

ルカによる福音書 20 : 41~44

「わたしの主」

＜復活の問答の後に＞

ルカによる福音書を読み進めています。20章あたりは、イエスさまがエルサレムに入られてから、十字架に架けられるまでの、一週間の歩みが語られているところです。

その間にイエスさまは、ご自分が何者で、どのようなお方であるか、ということ、御言葉や御業によって、人々に示しておられます。

今回は、サドカイ派という、復活を否定する人々からの質問に、イエスさまがお答えになったことが語られていました。

サドカイ派の人々は、地上の命を終えて肉体が死んだ後、この世の終わりの日に、自分たちが復活させられる、ということに信じていませんでした。

その理由は、この世での人間関係が、復活したら辻褄が合わなくなって、おかしくなるから、というようなことでした。

そうして彼らは、復活を語っているイエスさまに、議論を挑んだのです。

しかしイエスさまは、復活とは、天使に等しい者とされることである。つまり、終わりの日の復活とは、わたしたちの存在が、心も、魂も、体も、人間関係も、すべてが神さまの御手によって新しくされ、完成させられることなのであって、単にこの世の続きを生きることではない、と教えられました。

また、イエスさまは、神さまとの関係に生きることこそ、人が本当に生きるということである。この世の肉体が死んだとしても、神さまとの関係に生きている者は、復活を与えられ、生きる者とされる。神さまは、生きている者の神なのだから、と教えて下さいました。

今日は、その復活の問答の後、このサドカイ派の人々に、イエスさまの方から語られたところです。突然、「メシアはダビデの子だ」とか、旧約聖書が引用されたりして、一度聞いただけでは、ちょっと何を言っているか分からない、謎かけのような内容です。

しかし、前回イエスさまが、復活というものは、人間のこの世の延長ではなく、人の想像の範囲に収まるものではない、まったく新しいものである、と語られたように。ここでは、ご自分がメシアである、救い主である、ということも、この世のことから捉えられることではない。人が期待したり、想像したりする範囲に収まるものではない、ということをお教えしようとしておられます。

メシアとは、どういう者なのか。イエスさまは、どのようなメシアなのか。今日の所は、

そのことが語られているのです。

### <ダビデの子>

さて、41 節に、イエスさまはこう言われたとあります。「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。」

「メシアはダビデの子だ」。この一つの意味は、「メシア」、つまり、神さまが人々を救うために、遣わして下さる「救い主」は、ダビデの子孫から生まれる、という事です。このことは旧約聖書にいくつも預言されており、当時のユダヤ人は皆そのように信じていました。

ルカによる福音書も、まさにイエスさまがダビデの家系であるヨセフの子として、ダビデの町ベツレヘムでお生まれになったことを告げ、イエスさまの誕生を、旧約聖書の成就として語ってきました。

ですから、メシアはダビデの子だ。救い主は、ダビデの子孫から起こる。これはその通りであり、人々にとっても、特に問題はないのです。また、イエスさまも、まさにダビデの子孫としてお生まれになったのです。

では、イエスさまは「どうして人々は、『メシアはダビデの子だ』と言うのか。」と言われたのでしょうか。

それはもう一つ、人々の間には、「ダビデの子」、つまり、ダビデの子孫であるメシアは、ダビデ王の跡を継ぐ者である。つまり、メシアは、ダビデ王の偉業を継承する者である、という考えがあったからです。

ユダヤ人たちは、ダビデの子孫から生まれる救い主は、イスラエルの黄金時代、ダビデ王の時代の最も栄えた、最も栄華に満ちたイスラエルの王国を、地上に再び打ち立てる王であるに違いない。そのような者こそ、ダビデ王の子孫から生まれる、ダビデ王の後継者であり、救い主であり、メシアだ。そう期待し、信じていたのです。

ですから、「人々が、『メシアはダビデの子だ』と言う」。それは、ユダヤ人たちが、メシア、救い主は、ダビデ王の地上の王国を再建するような、ダビデ王の跡継ぎとしてのメシアとして、期待している、ということなのです。

しかし、イエスさまはここで、メシアはそのような者ではない。人々の期待に応える、地上の王などではない、ということを教えようとしておられます。

これまでも、ユダヤ人の中のある人々は、イエスさまこそ、まさにこの地上の王国を再建する救い主だ。失われた王国を取り戻してくれる、あの偉大なるダビデ王の後継者に違いない。そう思って、喜んでイエスさまを歓迎しています。

しかしまた、ある人々、特にユダヤ人の指導者たちは、イエスさまなんか、そのような立派なメシアであるはずがない。罪人を赦したり、汚れている人と一緒に食事をしたりして、

律法に背くようなことをしている。そのような人物は、ダビデ王を継承するメシアなどではあり得ない。そう判断して、イエスさまを排除しようとしています。

どちらも、自分たちが思い描くメシア像、救い主像があり、イエスさまがその理想にふさわしければ、救い主として受け入れる。ふさわしくなければ、救い主失格である。そんな風に、自分の思いに従って、自分の基準で、イエスさまをメシアかどうか判定しているのです。

しかし、イエスさまが救い主であるかどうか。それは、人間が、わたしたちが、決めることではありません。

わたしたちが、わたしの救い主としてふさわしいかどうか、イエスさまをテストして、わたしを納得させられたら、受け入れましょう。わたしの期待に応えるのなら、信じてあげましょう、と言う。そんなことは、わたしを救って下さる方に対して、とても傲慢なことではないでしょうか。

それではまるで、わたしたちが救い主を雇う「主人」かのようです。納得できなければ、取り換えるのでしょうか。期待通りでなければ、救い主を止めさせて、他の救い主にふさわしい者をまた探すのでしょうか。

そんな、わたしたちが決めるような救い主は、本当に救い主なのでしょうか。

そして、今を生きるわたしたちもまた、このような過ちに陥っているかも知れません。

救い主なら、わたしのこんな状況を、このように救って下さるべきだ。救い主なら、こんな出来事は起こらないようにしなければならない。救い主なら、なぜこのようにして救ってくださらないのか。

わたしたちもまた、救い主が、自分の求める救い、希望する事柄を与えてくれるようにと、願っているかも知れません。救い主は、こういう方であるべきだと、自分の願望を投影しているかも知れません。

しかし、救い主は、神さまが、わたしたちを救うために遣わされたお方です。

ですから、イエスさまを救い主となさるのは、天の父なる神さまなのです。

救い主イエスさまは、わたしたちの願いを叶えるためではなく、神さまの御心を成し遂げるために、来られた方だからです。そして、イエスさまによって実現する神さまの御心とは、他でもない、わたしたちを救う、ということなのです。

神さまの御心、神さまが望んでおられることは、罪と死に捕らえられ、神さまから離れてしまったわたしたちを、御許に立ち帰らせ、神さまと共に生きる者にする、ということです。

罪と死に捕らえられたわたしたちは、ただ差し出された救いの御手を掴むしかありません。いや、わたしたちには、もはや掴む力さえないのです。しかし、神さまの方から、わたしたちを捕らえ、救い上げて下さる。わたしたちはその御手を信じて身を委ねるしかありません。

そして、そのわたしたちに差し出された御手こそ、差し出された救いこそ、神の御子イエスさまなのです。神さまはイエスさまを、わたしたちの救い主として、わたしたちのところ

に遣わして下さったのです。

<神の右の座に>

ですからイエスさまは、ご自分がメシア、神から遣わされた救い主であることを、聖書の御言葉、つまり、ご自分を遣わされた神さまの御言葉から、示されました。

それで引用なさったのが、旧約聖書の詩編 110 編です。イエスさまは、110 編を引用して、このように言われました。42～44 節。

「ダビデ自身が詩編の中で言っている。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着きなさい。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで」と。』このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」

まず、詩編は、ダビデ王が歌ったものとされています。そのダビデ王が言います。「主は、わたしの主にお告げになった。」

この最初の「主」は、天の父なる神さまのことです。そして「わたしの主」というのは、神さまがダビデの子孫から興すと約束された、メシア、救い主のことです。

ダビデは言います。「主なる神が、わたしの救い主なる主に、お告げになった。」

ここでまず、ダビデ王自身が、自分の子孫から生まれて、救い主となる人物を、「わたしの主」と呼んでいます。だから、ダビデの子孫から生まれる救い主、メシアは、地上のダビデ王以上の存在である。ダビデ王自身も主と仰ぐ方である、ということです。

ですから、「メシア」は単に、ダビデ王の偉業を受け継ぎ、地上のことを成し遂げる者ではない、それ以上のものである、ということです。

しかし、このダビデのセリフが、イエスさまがダビデ以上の存在である「メシア」だ、ということの根拠なのではありません。

イエスさまは、メシアがどのような者であるかを、天の父なる神さまが、その救い主、メシアとなる者に語られたことから、明らかにされました。

それが、「わたしの右の座に着きなさい」との御言葉です。

右の座に着く、というのは、ある権力者、支配者と、同等の権威と支配力を持つ、という意味です。神さまが遣わされるメシア、救い主は、神の右の座に着く方である。それは、メシアは神と等しい者である。神の力と権威を、神と同様に持つ者である、ということです。

すべての人を罪から救うために、神さまから遣わされる救い主は、ダビデの子孫から生まれる者であり、また、神と等しい者、神の子である、とイエスさまは仰っているのです。

そしてこのことは、メシアが、神の右の座に着くことで明らかになるのです。

それはつまり、イエスさまが十字架で死に、葬られ、復活し、天に上げられ、神の右の座に着かれる。この時にこそ、イエスさまという人物が、まことに救い主であり、神の御子である、ということが明らかにされるのです。

イエスさまは、今日のこの箇所では、すべてをはっきりとはお語りになりませんでした。これらのことは、イエスさまがこれを語り終えてから、十字架へ向かい、御業を成し遂げられていく中で、実現していくことだからです。

ですから、この時点では、イエスさまの話聞いたサドカイ派も、また近くで一緒に聞いていたであろう弟子たちも、意味が何も分からなかったに違いありません。

しかし、これから弟子たちは、イエスさまが十字架に架けられて死に、三日目に復活し、天に上げられるのを目撃します。その時、弟子たちは、イエスさまが語られた、この詩編 110 編を、はっきりと思い起こしたのです。

天に上げられたイエスさまは、神の右の座に着かれた。救いの御業を成し遂げ、わたしたちの罪の贖いを成し遂げ、神の力をもって、神の権威をもって、イエスさまは、今も、これからも、わたしたちを支配し、守り、導いて下さるのだ、と。

ルカによる福音書と同じ著者ルカによる、使徒言行録という書物では、イエスさまが十字架の死から復活して、天に上げられた後のことが語られています。

まさにそこで弟子たちが、この詩編 110 編を引用して、このように告白しています。少し長いですが、使徒言行録の 2 章 29 節以下を見てみましょう。

「兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあり、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることはない』と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。ダビデは天に昇りませんでした。彼自身こう言っています。『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。わたしがあなたの敵を／あなたの足台とするときまで。」』だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

イエスさまが十字架に架かり、葬られ、復活し、神の右に上げられた。十字架のイエスさまを、神さまは主とし、またメシアとなさった。

イエスさまは、すべての出来事の後に、この確信へ至るようと、弟子たちを招いておられたのです。

### <思いを超えて>

神さまのなさることは、わたしたちの思いを大きく超えています。救い主イエスさまがなさったことは、わたしたちの願いや、理想や、思いを、はるかに凌ぎ、わたしたちには思いも及ばないものです。

神の御子が、一人の貧しい、弱い、小さなまことの人間となって、馬小屋にお生まれになるとは、どういうことなのでしょう。神の御子が、罪人と共に食事をし、病人に触れて癒し、汚れた者たちと共におられるとは、どういうことなのでしょう。神の御子が、神さまに背いたわたしたちのために、苦しみを受け、血を流し、わたしたちの罪を贖うために、その命を差し出されるとは、どういうことなのでしょう。

神さまの救いの御業は、わたしたちが求めるものよりも、はるかに大きく、深く、計り知れないものであり、まったく驚くべきものです。

しかし、これらのことはすべて、わたしたちの命をお造りになった神さまが、そこまでわたしたちのことを愛し、慈しみ、大切に思っていて下さっている、ということに他なりません。

神さまの御心を実現して下さるイエスさまが、そのご生涯において、御言葉と御業のすべてにおいて、その神さまの愛を示して下さいました。喜んで、わたしたちの救い主となって下さいました。

神さまの愛とは、そのように、わたしたちが神さまと共に生きる者となるためなら、どんなことでもして下さい。わたしたちのために、惨めになることも、貧しくなることも、ご自分が苦しみを受け、罪を背負い、命を与えて下さることまでして下さい。そこまでしても罪を赦し、そこまでしてもわたしたちを生かそうとして下さる。そのような愛です。

そして、この神さまの御心を実現するために、わたしたちを愛し抜き、十字架においてすべてを成し遂げて下さったイエスさまを、神さまは復活させられ、天に上げられ、右の座に座らせられたのです。まことに、このイエスさまこそが、神の御子であり、メシアであると、はっきりと示して下さいました。

イエスさまは、メシア、救い主です。ダビデの子孫からお生まれになり、わたしたちの思いもよらない仕方で、罪を赦し、滅びの死から救い、神さまの御許へと招いて下さる、神の御子です。

このことを示されたわたしたちが求められているのは、わたしたちの救い主となって下さった、このイエスさまを信じ、イエスさまの救いを受け取り、この神さまの愛に生きることです。イエスさまは、わたしの救い主。イエスさまこそ、わたしの、まことの主です。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

神の御子イエスさまを、わたしたちの救いのために、わたしたちの救い主として遣わして下さいましたこと。イエスさまが、そのためにまことの人となり、苦しみも、悲しみも、罪も、死も、すべてを担って下さったことを感謝いたします。

十字架の死によって、わたしたちの救いの実現して下さいましたイエスさまは、復活し、天に上げられ、今はあなたの右に座し、わたしたちを愛と恵みによって支配し、終わりの日まで導いて下さいます。わたしたちのために、執り成し、祈り続けて下さいます。

この方が、わたしたちの救い主、わたしたちの主であると、心から信じ、依り頼み、告白する者として下さい。

このお祈りを、わたしたちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン